双葉通信【第 171 回】（被災地を行く№2）“被災地の切り捨ては許さない”20230410

上　田　　勉

◇福島県浪江町の一部の避難指示解除 3 月 31 日に

富岡町の一部も 4 月 1 日に－ 原発事故の復興拠点、住民帰還は見通せず

東京電力福島第一原発事故による放射能汚染で立ち入り規制が続く帰還困難区域のうち、福島県浪江町の一部地域で 31 日、避難指示が解除された。4 月 1 日には、富岡町の一部地域も避難指示解除となる。事故から 12 年後に帰還への選択肢が用意されたが、どれほどの住民が戻ってくるかは見通せない。（小野沢健太）

避難指示解除の対象は、帰還困難区域内で優先的に除染を進める「特定復興再生拠点区域（復興拠点）」。浪江町は町の東部と西部の計 661 ヘクタールで、町全域の 8 割は帰還困難区域のまま。復興拠点には今年 1 月時点で 897 人が住民登録しているが、解除前の準備宿泊への申し込みは 22 人にとどまった。（「東京新聞」4 月 1 日付け）

◆（東日本大震災１２年）「なつかしき　津島の山の　ふる里よ――」　短歌愛した、亡き母の無念　浪江町津島地区

「おふくろを帰してやりたかった」。津島で生まれ育った紺野則夫さん（68）は、2018 年に 91 歳で亡くなった母リシ子さんのことを思った。実家周辺は解除区域に入ったが、裏手の畑は雑草で覆い尽くされ、庭の池は落ち葉が広がる。それでも、母が生きていたら、大好きな津島に真っ先に帰っただろうと思う。

【リシ子さんの 11 年７月の日記帳】

《津島の人達はどこにいるのだろうか。早く皆さんに会いたいです。会って大きな声で話し笑い合いたいです。私のあのほがらかな気持ちがどこかへ逃げて行った様な気分です》

《福島を　はなれて早や四月　思いて遠し　山里の道》

ふるさとを追われ、半年がたとうとしていた 11 年 8 月 29 日。福島県本宮市に完成した浪江町民向けの仮設住宅に居を移した。市内に避難していた則夫さんは、震災後初めてリシ子さんの姿を見た。「どうしちゃったの」。震災前のふっくらとした面影はなく、別人のようにやせていた。東京で下痢が続き、震災当時 54 キロあった体重が 10 キロも減っていた。福島への帰還は悲願だったが、約 100 戸の仮設住宅に顔なじみの友人はいなかった。

《仮設のへやは　四畳半　孤島に　老婆　一人きり》

《仲良しの　友の姿を　思い出し　元気で居てと　涙流るる》

リシ子さんの心をいやしてくれたのは、津島に通うことだった。彼岸やお盆に墓参りをして、自宅にも行った。ただ、それは帰れない現実、変わりゆくふるさとの姿を直視する時間でもあった。

《枯れ草しげる　我がふる里は　見るかげもなく悲しき》

16 年に戸建ての復興住宅へ。1 年後、手押し車を使用中に転倒して大けがをした。2 カ月の入院中に体力は落ち、車いす生活になった。不眠症にも悩まされ、体重は震災前から 20 キロ近く落ちた。

【18 年１月の日記帳】

《今年は体を大事にして生活したいと思います。神様お守り下さいませ。心よりお願い致します》

同年１０月、復興住宅で意識がもうろうとして動けないリシ子さんをヘルパーが見つけた。入院したが、約３週間後の１１月１８日、則夫さんたちに見守られながら、この世を去った。復興住宅で見つかった菓子箱には、リシ子さんが避難中に短歌や日々の思いをつづったノートやチラシなどの紙片が入っていた。日記帳の記述は、亡くなる７カ月前で終わっていた。　《なつかしき　津島の山の　ふる里よ　生きて帰れず　七年過ぎ行く》（福地慶太郎）」（「朝日新聞デジタル」2023 年 3 月 31 日 16 時 30 分）

【浪江町の避難指示解除―特定復興再生拠点区域（赤色）】

【津島地区の街並み（浪江町）［2022 年 9 月 6 日撮影］】

【浪江町津島支所［2022 年 9 月 6 日撮影］】